張籍詩訳注（2）

――「雑怨」「三原李氏園宴集」――

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote（2）

畑村　学
橘　英範

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

本篇には、「雑怨」「三原李氏園宴集」（ともに巻一）の訳注を掲載する。

3 雑怨

【題解】

薄情な夫に対する妻の怨みを詠じた詩。『全唐詩』は、「雑」に対して「一作離」と注記する。その場合「離別の怨み」の意。

同題の楽府が、『楽府詩集』巻四三「相和歌辞一八」に六篇採録されている。すなわち、孟郊（751～814）の三首と、聶夷中（837～884）の三首である。いずれも女性の嘆きが詠じられており、この楽府詩のテーマであることがわかる。ただし、張籍のこの詩は『楽府詩集』には採録されていない。

【本文・書き下し文】

1 切切重切切　　切切　重ねて切切
2 秋風桂枝折　　秋風に　桂枝折る
3 人當少年嫁　　人　少年に当たりて嫁するに
4 我當少年別　　我　少年に当たりて別る
5 念君非征行　　念う　君が征行するに非ざるに
6 年年長遠途　　年年　長遠の途にあるを
7 妾身甘獨歿　　妾身　独り歿するに甘んずるも
8 高堂有舅姑　　高堂には　舅姑有り
9 山川豈遙遠　　山川　豈に遥かに遠からんや
10 行人自不返　　行人　自ら返らず

【口語訳】

1 ひゅうひゅう　また　ひゅうひゅうと
2 秋風が吹いて　桂樹の枝が折れました
3 他の人は　年若くして嫁いでゆくのに
4 わたしは　年若くして別れることになりました
5 あなたが　従軍でもないのに
6 毎年　遠くに旅に出ているのが気がかりです
7 わたしが　独り死んでしまうのはかまいませんが

8 奥座敷には　義父さんと義母さんがいます
9 山や川があったって　どうして遠いことがありましょう
10 出かけたあなたが　自分から戻って来ないだけです

【語釈】

1・2　切切重切切、秋風桂枝折

〔切切〕冷たい風の吹きつける音。また、そうした風の音に感じて憂えるさま。謝朓「郡内登望」（『文選』巻三〇）に、「切切陰風暮、桑柘起寒煙」（切切たり　陰風の暮、桑柘　寒煙　起こる）とあるのは風の音。張籍の「寄別者」（巻七）に、「寒天正飛雪、行人心切切」（寒天　正に飛雪あり、行人心切切たり）とあるのは、「飛雪」により生ずる憂いのさまを言う。

なお「○○重○○」の句法は、古くは「古詩十九首」（『文選』巻二九）其一に、「行行重行行、与君生別離」（行き行きて　重ねて行き行く、君と生きながら別離す）と見える。類似した句法が、張籍のその他の詩にも見え、「促促詞」（巻一）に、「促促復促促、家貧夫婦懽不足」（促促　復た促促、家貧にして　夫婦　懽び足らず）、「各東西」（巻一）、「遊人別、一東復一西」（遊人　別れて、一は東に　復た一は西に）、「宛転行」（巻一）に、「宛転復宛転、憶君更未央」（宛転　復た宛転、君を憶うも更に未だ央きず）と見える。

〔秋風〕秋風。秋は草木が凋落する季節であり、『礼記』月令「季秋」にも、「是月也、草木黄落」（是の月や、草木黄落す）と記載される。文学作品では、漢の武帝「秋風辞」（『文選』巻四五）に、「秋風起兮白雲飛、草木黄落兮雁南帰」（秋風起りて白雲飛び、草木黄落して雁は南に帰る）とうたわれている。

この詩では、秋の自然描写と、妻の思夫の嘆きが結びついているが、同じく思夫の情をうたった魏の文帝「燕歌行」（『文選』巻二七）の冒頭にも、「秋風蕭瑟天気涼、草木揺落露為霜」（秋風蕭瑟として　天気涼し、草木揺落して　露　霜と為る）と、秋の風景描写が見える。

なお、こうした「悲秋」の伝統は、宋玉「九弁」（『文選』巻三三）に、「悲哉秋之為気也、蕭瑟兮草木揺落而変衰」（悲しいかな　秋の気たるや、蕭瑟として草木揺落して変衰す）とあるのに始まる。中国文学における「悲秋」については、小尾郊一博士『中国文学に現われた自然と自然観――中世文学を中心として――』（岩波書店、一九六二年）第一章第一節「秋をうたう詩」に詳しく述べられている。

〔桂枝〕桂の樹の枝。「秋風」との組み合わせは、沈約「鐘山詩応西陽王教」（『文選』巻二二）に、「春光発壟首、秋風生桂枝」（春光は壟の首に発し、秋風は桂の枝に生ず）と見える。

桂樹は秋冬になっても葉の色を変えないことから、人の固い節操に喩えられる。例えば、江淹「雑体詩三十首」（『文選』巻三一）の、劉楨「感遇」の模擬詩に、「蒼蒼中山桂、団円霜露色。霜露一何緊、桂枝生自直」（蒼蒼たり　中山の桂、団円たり　霜露の色。霜露　一に何ぞ緊しき、桂枝　生じて　自ら直し）とあり、李善は、「言桂霑霜露而色不渝、身経夷険而操不易也」（言うこころは　桂は霜露に霑うも色渝らず、身は夷険を経るも操易らざるなり）と説明する。張籍の冒頭の二句には、家族を顧みない薄情な夫の心変わりが暗示されているとも考えられる。なお、李樹政注では、古く月に桂樹が生えていると信じられていたことから、「桂枝折」が満月が欠けたことを意味し、それが夫婦団円の取り返しがつかないことを喩えると説明する。

3・4　人当少年嫁、我当少年別

〔少年〕年若い頃。「年少」に同じ。梁の簡文帝「妾薄命」（『楽府詩集』巻六二）に、「盧姫嫁日晩、非復少年時」（盧姫　嫁日晩れ、復た少年の時に非ず）とある。

5・6　念君非征行、年年長遠途

〔征行〕従軍の旅。2「西州」の語釈参照。

〔年年〕毎年。陶淵明「擬古九首」其六（四部叢刊本巻四）に、「年年見霜雪、誰謂不知時」（年年　霜雪を見るに、誰か謂う　時を知らずと）とある。

〔長遠途〕遠い旅程。漢・劉向「九歎」遠逝に、「日杳杳以西頽兮、路長遠而窘迫」（日は杳杳として以て西に頽れ、路は長遠にして窘迫す）とある。

なおこの二句、四庫本では「念君昨征行、年年役長途」（念う　君が昨に征行し、年年　長途に役せらるるを）に作る。後の第10句「行人　自ら返らず」と合わせて考えれば、本文の方が、家族を顧みない夫の薄情さがよく伝わってくる。

7・8　妾身甘独歿、高堂有舅姑

〔妾身〕わたし。女性の謙遜の自称。曹植「雑詩六首」（『文選』巻二九）其三に、「妾身守空閨、良人行従軍」（妾身　空閨を守り、良人　行きて軍に従う）とある。張籍にこの他二例あり、「征婦怨」（巻一）に、「夫死戦場子在腹、妾身雖存如昼燭」（夫は戦場に死して　子は腹に在り、妾身　存すると雖も昼の燭の如し）、「春江曲」（巻七）に、「妾身生長金陵側、去年夫壻住江北」（妾身　生まれて金陵の側に長じ、去年　夫壻は江北に住む）とある。[注9]

〔甘独歿〕「歿」は死ぬ。

〔高堂〕義父や義母の生活する奥座敷。用例としては、古く宋玉「招魂」（『文選』巻三三）に、「高堂邃宇、檻層軒些」（高堂と邃宇と、檻ありて軒を層ぬ）と見える。父母の居る場所の意では、李白「送張秀才従軍」（王本巻一七）に、「抱剣辞高堂、将霍崔冠軍」（剣を抱きて高堂を辞し、将に霍冠軍に投ぜんとす）とある。

〔舅姑〕義父と義母。『礼記』内則には、嫁の嫁ぎ先での礼について記述があり、例えば、起床後の身だしなみについて、「婦事舅姑、如事父母。雞初鳴、咸盥漱、櫛縰、笄総、衣紳。左佩紛帨刀礪小觿金燧、右佩箴管線纊、施繫袠、大觿木燧、衿纓、綦屨」（婦　舅姑に事うるには、父母に事うるが如し。雞初めて鳴けば、咸盥漱し、櫛縰し、笄総し、衣紳す。左に紛・帨・刀・礪・小觿・金燧を佩び、右に箴・管・線・纊を佩び、繫袠を施き、大觿・木燧し、纓を衿び、屨に綦す）と、事細かに記されている。

妻の、夫が不在中の嫁ぎ先での苦労は、古くは、漢の桓帝時の童謡（『玉臺新詠』巻九）に、「大麦青青小麦枯、誰当穫者婦与姑、丈夫何在西撃胡」（大麦は青青　小麦は枯る、誰か穫に当たる者ぞ　婦と姑となり、丈夫は何くにか在る　西のかた胡を撃つ）と見えるが、主体が妻にあるわけではなく、戦争の悲劇を客観的にうたっている点で、張籍の詩とはやや異なる。同様のモチーフは、数多い六朝の楽府や閨怨詩にあっても目立つものではない。同じく新妻を一人称で取り上げた同様のモチーフの先例には、杜甫の「新婚別」（『詳註』巻七）に、「妾身未分明、何以拝姑嫜」（妾身　未だ分明ならず、何を以てか姑嫜を拝せん）とあるのが指摘できる。杜詩には張籍と同じく「妾身」の語も用いられていることから、張籍への影響の可能性が指摘できる。

なお、類似した内容の詩は、張籍に他にも見え、例えば「烏啼引」（巻一）は、役人の夫が罪を得て獄中にある間、妻が舅姑に仕えて帰りを待つ内容であり、「寄衣曲」（巻一）は、従軍した夫の無事を、年老いた姑とともに願う妻の思いがうたわれている。

9・10　山川豈遙遠、行人自不返

〔山川〕山や川。『周易』坎卦彖伝に、「天険、不可升也。地険、山川丘陵也」（天の険、升るべからざるなり。地の険は、山川丘陵なり）、また『毛詩』小雅「漸漸之石」に、「山川悠遠、維其労矣」（山川悠遠にして、維れ其れ労す）と見える。この詩と同じく妻の思夫の情をうたった魏の文帝「燕歌行二首」其二（『玉臺新詠』巻九）にも、「別日何易会日難、山川悠遠路漫漫」（別日は何ぞ易く　会日は難き、山川悠遠にして　路漫漫たり）と見える。

「山川」に似た語に「山水」があるが、例えば『文選』では、使用数は「山川」が圧倒的に多く、「山水」はわずか三例であり、意味としては、「山川」が、『周易』や『毛詩』の影響から、主として険阻な自然を表すのに対し、「山水」の方は、左思「招隠」（巻二二）に、「非必糸与竹、山水有清音」（糸と竹とを必するに非ず、山水に清音有り）、謝霊運「石壁精舎還湖中」（巻二二）に、「昏旦変気候、山水含清暉」（昏旦に　気候は変じ、山水は　清暉を含む）とうたわれるように、清澄な自然を表すようである。

〔遥遠〕遥かに遠い。秦嘉「贈婦詩三首」其一（『玉臺新詠』巻一）に、「念当奉時役、去爾日遥遠」（念う　当に時役を奉じて、爾を去ること日に遥遠なるべきを）とある。また謝霊運「登上戍石鼓山」（『古詩紀』巻五七）にも、「故郷路遥遠、川陸不可渉」（故郷　路は遥かに遠く、川陸　渉るべからず）とある。

〔行人〕旅人。ここでは夫を指す。同じく旅に出たまま戻ってこない夫を言う例として、顔延之「秋胡詩」（『文選』巻二二）に、「超遥行人遠、宛転年運徂」（超遥として行人は遠く、宛転として年運は徂けり）とある。張籍の詩に全部で二二例見られ、ここと同じ意味で使われる用例には、「憶遠」（巻六）に、「行人猶未有帰期、万里初程日暮時」（行人　猶お未だ帰期有らず、万里の初程　日暮の時）、「別離曲」（巻一）に、「行人結束出門去、幾時更踏門前路」（行人結束して門を出でて去る、幾時ぞ更に門前の路を踏むは）などがある。

【補】

張籍には、女性の「怨」を詠じた「○○怨」と題する詩が、この詩以外に「征婦怨」（巻一、『楽府詩集』巻九四）、「呉宮怨」（同前、『楽府詩集』巻九

一）、「楚妃怨」（巻六、『楽府詩集』巻二九）、「離宮怨」（同前）、「楚妃怨」（巻七、『楽府詩集』巻二九。ただし、詩題は「楚妃歎」に作る）と見える。また、妻の思夫の情を詠じた詩は、他に「寄衣曲」「別離曲」（ともに巻一）などがあり、女性の怨みや嘆きを主題とする詩が、張籍の詩を特徴づける大きな要素となっていることがわかる。

薄情な夫を怨む妻の情を詠じた詩は、唐代以前にすでに多く見られるが、張籍のこの詩のように、夫が不在中の、妻の嫁ぎ先での労苦を詠ずる詩は、管見では見い出せない。【語釈】でも述べたように、杜甫に先例があり、杜詩が張籍に与えた影響のひとつに指摘できるのではなかろうか。これについては更に検討したい。

【注】

①本集では「古楽府雑怨三首」に作る。

②聶夷中の三詩は、宇句の異同はあるが、孟郊「征婦怨四首」（華忱之・喩学才校注『孟郊詩集校注』、人民文学出版社、一九九五年）と同じもの。詩の数が異なるのは、孟郊の其三、四が合わさって、聶夷中の詩の其一となっているためである。

③『唐詩百名家全集』は、「夫壻」を「随夫」に作る。

（畑村）

4 三原李氏園宴集

【題解】

三原の李氏の庭園における宴会の作。

「三原」は県名。現在の陝西省三原県の東北に当たるという。現在の三原県は西安市から北へ40キロほどのところであるが、『中国歴史地図集』唐五代巻（地図出版社、一九八二年）を見ると、渭水をはさんで長安城の北方約50キロの場所に位置している。「李氏」については未詳。第9～12句の表現からすると、北方の節度使の幕僚となって、現在家におらず、家僕が庭園を公開しているようである。第4句の表現によれば、この庭園は有名な庭園だったようだが、管見の及ぶ限りでは、他の詩人の詩には詠じられていないようである。

なお、第3句の表現からすると、張籍は貴人の宴に陪席したようであるが、その人物が誰かはよく分からない。三原は長安近郊の地なので、長安で官僚となってからの作ではないかと推測されるが、制作年代は不明。羅氏も繫年していない。

「宴集」は宴会のこと。詩題に用いられた例としては、張九齢に「三月三日申王園亭宴集」（『全唐詩』巻四八）などの例があり、張籍の敬愛する杜甫にも「劉九法曹鄭瑕丘石門宴集」（『詳註』巻一）「崔駙馬山亭宴集」（同巻三）「上巳日徐司録林園宴集」（同巻二一）がある。

【本文・書き下し文】

1 暮春天早熱　暮春　天早に熱く
2 邑居苦囂煩　邑居　囂煩に苦しむ
3 言従君子樂　言　君子の楽しみに従い
4 樂彼李氏園　彼の李氏の園に楽しむ
5 園中有草堂　園中に　草堂有り
6 池引涇水泉　池には引く　涇水の泉
7 開戸西北望　戸を開きて　西北を望めば
8 遠見嵯峨山　遠く嵯峨山を見る
9 借問主人翁　借問す　主人の翁
10 北州佐戎軒　北州　戎軒を佐く
11 僕夫守舊宅　僕夫　旧宅を守り
12 爲客施榻筵　客の為に　榻筵を施す
13 膏壤有餘滋　膏壤　餘滋有り
14 竹樹芳且鮮　竹樹　芳にして且つ鮮
15 傾我所持觴　我が持する所の觴を傾け
16 盡日共留連　尽日　共に留連す
17 疎拙不偶俗　疎拙　俗に偶せず
18 常喜形體閑　常に喜ぶ　形体の閑なるを
19 況來幽棲地　況んや　幽棲の地に来たるをや
20 能不重笑言　能く　笑言を重ねざらんや

【口語訳】

1 晩春ともなると　もう暑くなってきて
2 ごみごみした家は　やかましくてわずらわしい

3 私は　君子の楽しみのお相伴で
4 あの李氏の庭園に　楽しむのだ
5 庭の中には　草堂があり
6 池には　涇水の流れを引いている
7 戸を開けて　西北の方を眺めると
8 遠くに　嵯峨山が見える
9 主人どのについて　尋ねてみると
10 北の方の州で　軍務を補佐しておられるそうな
11 その御者が　あるじのいない家を守り
12 客のために　こしかけや敷物を用意してくれる
13 肥沃な土地には　豊かな恵みがあり
14 竹や木は　香りがよく　色鮮やか
15 我が手に持った杯を傾けて
16 一日　みんなでゆっくりする
17 間抜けで世渡り下手の私は　世間様とは馬が合わず
18 からだがのんびりするのを　いつも喜んでいる
19 まして　この隠遁場所に来たのだから　なおさら
20 どうして　何度も　笑い語らずにいられよう

【語釈】

1・2　暮春天早熱、邑居苦囂煩

〔暮春〕晩春。三月を指して用いられることが多い。『毛詩』周頌「臣工」に「嗟嗟保介、維莫之春」（嗟嗟保介、維れ莫の春）とあり、『論語』先進に「莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而帰」（莫春には、春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて帰らん）の有名な語がある。張籍のこの詩も、第3・4句の表現からすると、この「先進」に基づいたものであろう。

なお「春の暮れ」が『中国文学歳時記』春上（同朋舎出版、一九八八年）に季語として採られている。

〔天早熱〕晩春になると、すでに夏の暑さがきざしていることをいう。「早熱」は用例未見。

〔邑居〕むらざと。また、密集して住むこと。『塩鉄論』散不足に「積功以市誉、不恤民之急、田野不辟、而飾亭落、邑居丘墟、而高其郭」（功を積んで以て誉を市い、民の急を恤えず、田野辟かれざるに、亭落を飾り、丘墟に邑居して、其の郭を高くす）とある。文学作品に用いられた例としては、班固の「西都賦」（『文選』巻一）に、「南望杜霸、北眺五陵、名都対郭、邑居相承」（南に杜霸を望み、北に五陵を眺め、名都　郭に対し、邑居　相い承く）という。また唐詩の例としては、岑参の「石犀」（『校注』巻四）の「向無爾石犀、安得有邑居」（向には爾　石犀無し、安んぞ　邑居有るを得ん）の句がある。

ここでは、ごみごみと密集した住宅地のことをいっており、マイナスイメージの用い方といえる。李氏の園のある第19句「幽棲の地」とは対照的な場所を言う。

〔苦囂煩〕「囂煩」はうるさくてわずらわしい。『中論』脩本に、「其脩之也、非若採金攻玉之渉歴艱難也、非若求盈司利之競逐囂煩也」（其の之を脩むるや、金を採り玉を攻むるの艱難を渉歴するが若きに非ざるなり、盈つるを求め利を司るの囂煩を競逐するが若きに非ざるなり）という。詩においては、李白の「題金陵王処士水亭」（王本巻二五）に「何時復来此、再得洗囂煩」（何れの時か　復た此に来たり、再び囂煩を洗うを得ん）という例がある。

冒頭の二句、家の暑苦しさを詠ずるところから歌い起こされる。そこを離れて、君子の清遊に相伴できるという方向で次の二句へと繋がる。

3・4　言従君子楽、楽彼李氏園

〔言従〕「言」は「ここに」と訓む可能性もあるが、『毛詩』小雅「都人士」に「我不見兮、言従之邁」（我　見ず、言　之に従いて邁かん）と「言従」の形で用いており、鄭箋に「言亦我也」とあるのに従い、ここでも「われ」と訓んだ。

〔君子楽〕この表現は、先に引いた『論語』先進を意識したものであろう。この故事が詩に用いられた例としては、陸機の「日出東南隅行」（『文選』巻二八）に、「暮春春服成、粲粲綺与紈」（暮春には　春服成る、粲粲たり　綺と紈と）の句がある。

【題解】にも記したが、この「君子」が誰を指すのかは不明。

〔楽彼李氏園〕「彼の李氏の園」という言い方からすると、有名な庭園だったようだが、これも先に記したように、詳細についてはよく分からない。

5・6　園中有草堂、池引涇水泉

〔園中〕「古詩十九首」其二（『文選』巻二九）に「青青河畔草、鬱鬱園中柳」（青青たり　河畔の草、鬱鬱たり　園中の柳）と見えるなど、詩中でも習見の語。ここでは、李氏の庭園をいう。

張籍にはもう一例あり、「讌客詞」（巻一）に「請君看取園中花、地上漸多枝上稀」（君に請う　看取せよ　園中の花を、地上は漸く多く　枝上は稀なり）という。こちらは花が散る前に宴会の楽しみを尽くそうという部分で用いられている。

〔有草堂〕「草堂」は草葺きの堂屋。孔稚珪の「北山移文」（『文選』巻四三）に「鍾山之英、草堂之霊」（鍾山の英、草堂の霊）といい、李善注に引く梁の簡文帝の『草堂伝』に「汝南周顒、昔経在蜀、以蜀草堂寺林壑可懐、乃於鍾嶺雷次宗学館立寺、因名草堂。亦号山茨」（汝南の周顒、昔経　蜀に在り、蜀の草堂寺の林壑の懐うべきを以て、乃ち鍾嶺の雷次宗の学館に於いて寺を立て、因りて草堂と名づく。亦た　山茨と号す）という。

諸橋『大漢和辞典』や『漢語大詞典』が指摘するように、杜甫の浣花草堂や白居易の廬山草堂など、旧時の文人の住居に用いられ、高雅の趣を帯びることばである。張籍の同時代人でもある白居易の廬山草堂については、平野顕昭氏に「白居易と廬山草堂」（『文芸論叢』三〇、一九八八年）の専論があり、また埋田重夫氏の「白居易と家屋表現―身体と居住空間を繋ぐもの―」（上＝『中国詩文論叢』第十五集、一九九六年、中＝同第十六集、一九九七年）の続稿で、詳細な検討がなされることが期待される。

張籍には、他に五例の用例がある。その中で、「春日行」（巻七）に「草堂晨起酒半醒、家僮報我園花満」（汝南の周顒、昔経　蜀に在り、蜀の草堂寺の林壑の懐うべきを以て、乃ち鍾嶺の雷次宗の学館に於いて寺を立て、因りて草堂と名づく。亦た　山茨と号す）といい、「張蕭遠雪夜同宿」（巻六）に「草堂雪夜携琴宿、説似青城館裏時」（草堂雪夜　琴を携えて宿り、説きて青城館裏の時に似たり）といい、「秋山」（巻六）に「草堂不閉石牀静、葉間墜露声重重」（草堂は閉ぢざるも石牀は静かに、葉間の墜露　声重重）というのは、張籍自身の住居を称した例のようである。

〔池引涇水泉〕「涇水」は川の名。『尚書』禹貢にも見える、古くから知られる川で、三原の西方を東南に流れ、長安の北方で渭水と合流する。『毛詩』邶風「谷風」に「涇以渭濁、湜湜其沚」（涇は渭を以て濁る、湜湜たる其の沚）と見え、『経典釈文』に「涇音経、濁水也、渭音謂、清水也」（涇は音経、濁水なり、渭は音謂、清水なり）とあるように、濁流の象徴となっている。

張籍の同時代人である柳宗元の「唐鐃歌鼓吹曲」十二篇其四（中華書局『柳宗元集』巻一。以下、柳宗元の詩文の引用は同書に拠る）に「涇水黄」があり、「涇水黄、隴野芒」（涇水は黄にして、隴野は芒たり）というのも、涇水が濁っているところからきた表現である。

この二句は李氏の庭園の描写。建物（草堂）と、恐らくそのそばにある池についていう。池の水の由来についていうのは、【題解】にも触れた杜甫の「崔駙馬山亭宴集」に「洑流何処入、乱石閉門高」（洑流　何れの処よりか入る、乱石　門を閉づれば高し）という表現がある。ここでも単に実景の描写と解しておいた。濁流の代表である涇水から水を引いているとわざわざ表現しているのには、何か意図があるようにも思わせるが、第8句の「嵯峨山」同様、実際の山川の名称を織り込んだ表現を工夫したのではないだろうか。

7・8　開戸西北望、遠見嵯峨山

〔開戸〕用例としては、『孫子』九地に「是故始如処女、敵人開戸。後如脱兎、敵不及拒」（是の故に始めは処女の如く、敵人戸を開く。後には脱兎の如く、敵拒ぐに及ばず）といい、左思の「呉都賦」（『文選』巻五）に「開北戸以向日、斉南冥於幽都」（北戸を開きて以て日に向かい、南冥を幽都に斉しうす）という。ごくありふれたことばだが、「開戸」と表現したのは、先に引いた杜甫の「崔駙馬山亭宴集」の「閉門」を意識して逆に用いたのかもしれない。

〔西北望〕西北の方角が詩に用いられた例としては、古く「古詩十九首」其五（『文選』巻二九）に「西北有高楼、上与浮雲斉」（西北に高楼有り、上は浮雲と斉し）とあり、阮籍の「詠懐詩十七首」其十五（『文選』巻二三）「孤鳥西北飛、離獣東南下」（孤鳥　西北に飛び、離獣　東南に下る）とある。

張籍にもう一例、「贈故人馬子喬」六首其三（『全唐詩補逸』巻六）に「東南望河尾、西北望崑崖」（東南　河尾を望み、西北　崑崖を望む）とあり、「望」の文字とともに用いている。

〔遠見嵯峨山〕「嵯峨」は山の形容としてよく用いられるが、ここでは固有名詞ではないだろうか。

『元和郡県図志』関内道・京兆府上「雲陽県」に「嵯峨山、一名巖薛山、在県東北十里。東西二十五里、南北二十里。山上有雲必雨、常以為候」（嵯峨山、一に巖薛山と名づく。県の東北十里に在り。東西二十五里、南北二十里。山上に雲有れば必ず雨ふり、常に以て候と為す）という。巖薛山は『説文解字』にも見える山で、『漢書』地理志上、左馮翊の池陽県の部分に「池陽県、恵帝四年置、巖薛山在北」（池陽県、恵帝の四年置く、巖薛山北に在り）とある。顔師古の注に「巖薛、即今俗所呼嵯峨山是也」（巖薛は、即ち今の俗に呼ぶ所の嵯峨山是なり）という。

『元和郡県図志』関内道・京兆府上「三原県」には、「本漢池陽県。巖薛山在今県西北六十里」（本　漢の池陽県なり。巖薛山　今県の西北六十里に在り）云々という記述がある。「門を開いて西北を眺めると、遠くに嵯峨山が見える」というのは、まさしくこの記述に合致しており、固有名詞と考える方がよいのではないかと思わせる。

なお、唐代の六十里は約三四キロだが、前出『中国歴史地図集』で見ると、三原から真西よりやや北の方角、二五キロ足らずのあたりに嵯峨山を記している。また、『中国県情大全』西北巻（中国社会出版社、一九九三年）の現在の三原県の項、「自然地理条件」の「地形地貌」に「県城西北四〇里有嵯峨山、山頂有雲気即雨、人視為雨侯」とあり、『元和郡県図志』の雲陽県と同じ言い伝えが残っているのは興味深い。

「嵯峨」ということば自体は、本来、高く険しい形容。『楚辞』淮南小山「招隠士」に「山気龍嵸兮石嵯峨、谿谷嶄巖兮水曾波」（山気は龍嵸として石は嵯峨たり、谿谷は嶄巖として水は曾波す）といい、陸機の「従軍行」（『文選』巻二八）にも「深谷邈無底、崇山鬱嵯峨」（深谷　邈かにして底無く、崇山　鬱として嵯峨たり）とあるなど、習見の語である。杜甫にも「江梅」（『詳註』巻一八）の「故園不可見、巫岫鬱嵯峨」（故園　見るべからず、巫岫鬱として嵯峨たり）などの例がある。

ただ、張籍の同時代人には、白居易（三例）・劉禹錫（一例）・韓愈（一例）・柳宗元（〇例）と用例自体が少なく、特に山に関する用例は一例もない。張籍の用例もこれのみである。中唐元和期になると、手垢のついた表現として、山の形容には用いられなくなったのかもしれない。その点からも、固有名詞と考えられるのではないだろうか。

前の二句を承けて、草堂からの眺めが描写される。前の句が建物→水という表現だったのに対し、こちらは建物→山という表現になっている。

9・10　借問主人翁、北州佐戎軒

〔借問〕尋ねる。陶淵明の「悲従弟仲徳」（四部叢刊本巻二）に「借問為誰悲、懐人在九冥」（借問す　誰が為に悲しむと、人の九冥に在るを懐う）という。杜甫が多くこのことばを用いており、十例の用例があるが、「両当県呉十侍御江上宅」（『詳註』巻八）では「借問持斧翁、幾年長沙客」と、「翁」の文字とともに用いている。ただ、杜甫の例は翁に対して「借問」するのに対し、張籍のこの句は、翁のことについて「借問」しているようである。張籍にも他に六例の用例がある。

〔主人翁〕主人に対する尊称。『史記』范雎伝の雎のことばに「主人翁習知之。唯雎亦得謁、雎請為見君於張君（主人翁　之を習知す。雎と唯も亦た謁するを得たり。雎請う　君を張君に見えしむることを為さん）という用例がある。詩における用例としては、同時代の白居易の「凶宅」（四）に「自従十年来、不利主人翁」（十年より来、主人の翁に利あらず）という句がある。

〔北州〕北方の州。『史記』匈奴伝に「北州已定、願寝兵休士卒養馬」（北州　已に定まり、兵を寝め士卒を休ませ馬を養わんことを願う）という。詩における用例としては、呉均「初至寿春作」（『文苑英華』巻二八九）に「北州少知舊、南陽寡相識」（北州　知旧少なく、南陽　相識寡し）という句がある。匈奴伝の場合は、楼蘭などの塞北の地をいうようだが、呉均の句は単に北の方の州という意味のようである。白居易の二例は、ともに「南州」と句中対にしており、北方の州の意味で用いてある。

李冬生注は北庭都護府のことを指すとするが、同時代の用例から見ても、北方の州の意味で解釈してよいのではないだろうか。

〔佐戎軒〕「戎軒」はもと戦車の意、広く軍務を指す。陸機の「漢高祖功臣頌」（『文選』巻四七）に「戎軒肇迹、荷策來附」（戎軒　迹を肇め、策を荷いて　来り附く）という場合は戦車の意味で用いている。魏徴の「述懐」（『全唐詩』巻三一）の「中原初逐鹿、投筆事戎軒」（中原　初め鹿を逐い、筆を投じて　戎軒を事とす）の例では、広く軍務を指している。ここでも軍務の意味であろう。「佐戎軒」で軍務を補佐する意味であろう。北方の節度使の幕客となっていることをいう。

この二句、庭園の由来を述べる四句の前半。風景の描写から一転して、園の所有者である李氏について述べる。

11・12　僕夫守旧宅、為客施榻筵

〔僕夫〕御者の意。『毛詩』小雅「出車」に「召彼僕夫、謂之載矣」（彼の僕夫を召し、之に載せよと謂う）とあり、毛伝に「僕夫、御夫也」という。『楚辞』離騒にも「僕夫悲余馬懐兮、蜷局顧而不行」（僕夫は悲しみ　余が馬は懐う、蜷局して顧みて行かず）といい、杜甫の「北風」（『詳註』巻二二）にも、「再宿煩舟子、衰容問僕夫」（再宿　舟子を煩わし、衰容　僕夫に問う）という用例がある。

〔守旧宅〕「旧宅」はもと住んでいた家。『春秋』昭公三年の左伝に「卒復其旧宅、公弗許」（卒に其の旧宅に復らんとするも、公許さず）という用例が見える。文学作品では、張衡の「南都賦」（『文選』巻四）に「於其宮室、則有園廬旧宅、隆崇崔嵬」（其の宮室に於いては、則ち園廬旧宅有り、隆崇崔嵬たり）という。

ここではあるじの李氏がいないために「旧宅」というのである。

〔為客施榻筵〕テキストは「施榻筵」に作る。『全唐詩』は「侍華筵」に作り、「侍華」に注して「一作施榻」という。

ここは恐らく「榻筵」がよいであろう。「榻」であればこしかけ。「榻筵」で腰掛けと敷物ということになる。すなわち「僕夫」が来客を歓迎して、宴席をしつらえてくれるというのであろう。後漢の陳蕃が客と交際せず、ただ友人の徐穉が来たときのみ榻を下し、去れば榻を懸けたという「懸榻」の故事（『後漢書』陳蕃伝）は有名である。ここでも客の来訪を待つということで、「榻」の文字で解釈した。

写本では木偏と手偏を区別しないことが多いので、この場合も写本段階の手偏がそのまま残ったものではないだろうか。なお、『佩文韻府』も「榻筵」の例としてこの句を引く。

「榻」の字を詩に用いた用例としては、謝霊運の「擬魏太子鄴中集」八首其一「魏太子」（『文選』巻三〇）に「澄觴満金罍、連榻設華茵」（澄觴　金罍に満ち、連榻　華茵を設く）といい、沈約の「和謝宣城」（『文選』巻三〇）に「賓至下塵榻、憂來命緑樽」（賓至れば　塵榻を下し、憂い来れば　緑樽を命ず）という。これらも来客を歓迎する意味での用例である。「榻筵」の語の用例は見当たらないが、潘尼の「遊西岳詩」（『太平御覧』巻八〇八）に、「金楼虎珀階、象榻璃瑁筵」（金楼　虎珀の階、象榻　璃瑁の筵）と並べて用いている。

なお、「榻」であれば、一般に「おさめる」の意で用いられる。陳琳の「為袁紹檄豫州」（『文選』巻四四）に「方畿之内、簡練之臣、皆垂頭榻翼」（方畿の内、簡練の臣、皆　頭を垂れて翼を榻む）とあり、韓愈・孟郊の「鬬鶏聯句」（錢仲聯繫年・集釈『韓昌黎詩繫年集釈』巻五。以下、韓愈の詩の引用は同書に拠る）に「頭垂砕丹砂、翼榻拖錦綵」（頭は垂れて　丹砂を砕き、翼は榻まりて　錦綵を拖く）という（韓愈担当部分）。この場合、「筵を施榻す」と訓むことになろうか。

『全唐詩』の「侍華筵」に従えば、華やかな宴席にはべるの意味になろう。

庭園の由来について述べる部分の後半。主人の留守中に、使用人によって庭が公開され、客のために宴席が用意されていることが述べられる。

13・14　膏壌有餘滋、竹樹芳且鮮

〔膏壌〕テキストは「高壌」に作る。『文苑英華』と『全唐詩』は「高懐」に作り、「一作膏壌」と注する。「高壌」は用例のないことばで、意味もよく分からない。「膏壌」の同音による誤りと考えて解釈した。

「膏壌」であれば、肥沃な土壌のことをいう。『史記』斉太公世家の「太史公曰」に「自泰山属之琅邪、北被于海、膏壌二千里」（泰山より之を琅邪に属し、北は海に被るまで、膏壌二千里なり）といい、『漢書』王莽伝中「膏壌殖穀」の顔師古注に「膏壌、言其土肥美也」（膏壌は、其の土の肥美なるを言うなり）という。詩における用例としては、曹植の「喜雨」（四部叢刊本巻五）に「嘉種盈膏壌、登秋必有成」（嘉種　膏壌に盈つ、登秋　必ず成る有らん）の句がある。

「高懐」であれば、高雅な思い。杜甫の「贈鄭十八賁」（『詳註』巻一四）に「高懐見物理、識者安肯哂」（高懐　物理を見る、識者　安んぞ肯えて哂わん）という用例がある。

〔有餘滋〕『文苑英華』及び『全唐詩』は「餘興」に作り、「一作」として「餘滋」と注する。上の「高壌」が「膏壌」であるならば、「餘滋」の方がよいであろう。次の句にも繋がりやすい。

「餘滋」は豊かな滋養。陶淵明の「和郭主簿」二首其一（四部叢刊本巻二）に「園蔬有餘滋、旧穀猶儲今」（園蔬　餘滋有り、旧穀　猶ほ今に儲う）とあるのは、味の良さをいうようである。白居易の「効陶潜体詩十六首」其四（二一六）に「持翫已可悦、歓嘗有餘滋」（持翫　已に悦ぶべく、歓嘗　餘滋有り）というのも、味についていう。張籍の場合は、肥沃な土壌の豊かな

恩恵をいうのであろう。類似した表現として、柳宗元の「種朮」（『柳宗元集』巻四三）に「土膏滋玄液、松露墜繁柯」（土膏　玄液を滋し、松露　繁柯より墜つ）の句がある。

『文苑英華』や『全唐詩』の「高懐有餘興」であれば、旧主人の高雅な思いには、興趣がそなわっているというような意味になろうか。次の句の「竹樹」を植えた心遣いをいうことになるのであろうが、「膏壌有餘滋」の方がよく通じるように思われる。「高」の文字になっていたので通じさせようとして「滋」を「興」に改めたのではないだろうか。

〔竹樹芳且鮮〕「竹樹」は竹と樹木。沈約の「遊沈道士館」（『文選』巻二二）に「山嶂遠重畳、竹樹近蒙籠」（山嶂　遠くして重畳たり、竹樹　近くして蒙籠たり）といい、張説の「晦日詔宴永穆公主亭子賦得流字」（『全唐詩』巻八七）に「園亭含淑気、竹樹遶春流」（園亭　淑気を含み、竹樹　春流を遶る）の句がある。

「芳且鮮」というのは、竹樹の香りがよく、緑が鮮やかであることをいうのであろう。この香り高く色鮮やかな竹や樹が、肥沃な土地の恵みなのである。なお、「芳」の字義については、許山秀樹氏「詩語としての『芳』と『香』—古典中国語における『かおり』を意味する語をめぐって—」（『中国詩文論叢』第十六集、一九九七年）に詳しい。

再び庭園の描写に戻る。自然の恩恵に恵まれて竹や木が茂る景色が詠ぜられ、次の立ち去りがたい思いへと繋がって行く。

15・16　傾我所持觴、尽日共留連

〔傾我所持觴〕私の持っている杯を傾ける。「觴」はさかずき、「傾觴」はさかずきを傾けること。棗拠の「詩」（『藝文類聚』巻二八）に「重岩吐神溜、傾觴挹涌波」（重巌　神溜を吐き、觴を傾けて　涌波を挹む）の句がある。ここでは、李白の「贈劉都使」（王本巻一一）に「高談満四座、一日傾千觴」（高談　四座に満ち、一日　千觴を傾く）と同じように、酒を飲む意。

〔尽日〕一日じゅう。王粲の「従軍詩」五首其一（『文選』巻二七）に「尽日処大朝、日暮薄言帰」（尽日　大朝に処り、日暮　薄か言に帰る）というなど、詩中でも習見の語。

張籍には他に三例、「和李僕射雨中寄盧厳二給事」（巻三）の「尽日無来客、閑吟感所懐」（尽日　来客無く、閑吟　懐う所に感ず）、「登楼寄胡氏兄弟」（巻六）の「独上西楼尽日閑、林煙演漾鳥綿蛮」（独り西楼に上りて　尽日閑なり、林煙演漾として　鳥綿蛮たり）、「書懐寄元郎中」（巻四）の「重作学官閑尽日、一離江塢病多年」（重ねて学官と作り　閑なること尽日、一たび江塢を離れ　病むこと多年）、マイナス方向のものもあるが、全て「閑」であることと結びつけて「尽日」の語が用いられている。ここでも、のんびりと一日を過ごしたという思いがあるのかもしれない。

〔共留連〕「留連」はとどまって立ち去りがたいことを形容する双声語。宴会の他の参加者を意識して「共」という。曹丕の「燕歌行」二首其二に（『玉臺新詠』巻九）「飛鶴晨鳴声可憐、留連顧懐不能存」（飛鶴晨に鳴き　声憐れむべし、留連顧懐　存する能わず）という用例がある。張籍のもう一例、「贈殷山人」（巻三）の「避喧長汨没、逢勝即留連」（喧を避けて　長に汨没し、勝に逢いて　即ち留連す）の句も、美しい風景に出逢ってとどまることをいう。

前の二句の自然描写を承けて、それを存分に楽しむ気持ちを詠ずる。

17・18　疎拙不偶俗、常喜形体閑

〔疎拙不偶俗〕「疎拙」は『韓非子』難四に「事以微巧成、以疏拙敗」（事は微巧を以て成り、疏拙を以て敗る）という。ここでは間がぬけていて世渡りが下手なこと。

「不偶俗」は世俗と合わない。『後漢書』呉良伝に「毎処大議、輒拠経典、不希旨偶俗、以徼時誉」（大議を処する毎に、輒ち経典に拠り、旨を希い俗に偶して、以て時誉を徼めず）という。陸機の「文賦」（『文選』巻一七）にも「徒悦目而偶俗、固高声而曲下」（徒に目を悦ばせ俗に偶するも、固より声を高くして曲下る）とある。

「疎拙」「不偶俗」、ともに自負心を伴ったことば。陶淵明の「少きより俗に適うの韻無し」や「守拙」の系譜に連なるものである。

〔常喜形体閑〕「形体」は肉体のこと、「精神」に対する。『荘子』在宥に「汝徒処無為而物自化。墮爾形体、吐爾聡明」（汝は徒だ無為に処りて物自から化せん。爾が形体を墮ち、爾が聡明を吐く）とある。『淮南子』精神訓には「夫精神者、所受於天也、而形体者、稟於地也」（夫れ精神なる者は、天に受くる所なり、而して形体なる者は、地に稟くるなり）と、「精神」と対にして用いている。詩における用例としては、潘岳の「内顧詩」二首其二（『玉

臺新詠』巻二）に「形体隔不達、精爽交中路」（形体　隔たりて達せざるも、精爽中路に交わる）という句がある。

以上のように精神と対にして用いることばであるが、対立するものではなく、体がのんびりとしているというのは、精神面とも関わってくる。『春秋繁露』天地之行にも、比喩の中ではあるが「君賢、臣蒙其恩。若形体之静、而心得以安」（君賢なれば、臣　其の恩を蒙る。形体の静かにして、心の以て安らかなるを得るが若し）という。

この詩の場合も、世俗を離れて体が「閑」であることは、精神的な自由さと結びついている。

張籍自身の性質について、多少の自負心を交えつつ述べる部分。結びの二句へと繋がって行く。

19・20　況来幽棲地、能不重笑言

〔況来幽棲地〕「幽棲」は隠れ住むこと。謝霊運の「隣里相送方山」（『文選』巻二〇）に「資此永幽棲、豈伊年歳別」（此に資りて　永く幽棲せん、豈に伊れ　年歳の別れならんや）といい、杜甫「崔駙馬山亭宴集」（前出）にも「蕭史幽棲地、林間踏鳳毛」（蕭史　幽棲の地、林間　鳳毛を踏む）という。

〔能不重笑言〕「能不」は反語。「笑言」は『周易』震の卦辞に「震、亨。震來虩虩、笑言啞啞、震驚百里、不喪匕鬯」（震は、亨る。震の来るとき虩虩たり、笑言啞啞たり。震は百里を驚かし、匕鬯を喪わず）という。詩に用いられた例としては、陸機の「日出東南隅行」（『文選』巻二八）に「窈窕多容儀、婉媚巧笑言」（窈窕として　容儀多く、婉媚にして　笑言に巧みなり）という。

友人との集いを「笑言」によって表現した例としては、李白の「金陵白下亭留別」（王本巻一五）に「向来送行処、迴首阻笑言」（向来　送行の処、首を迴らして　笑言を阻む）という句がある。

自分の性質を述べた部分を承け、その自分が充分に集いの喜びを味わったことを述べて結びとする。

【補】

この詩は四句ごとに分けることができよう。

第1～4句、状況説明（むさ苦しい家を抜け出し、貴人に陪して遊びに来たこと）

第5～8句、風景の描写（建物→水、建物→山）

第9～12句、李氏園の由来

第13～16句、美しい風景の中で酒を飲む喜び

第17～20句、結び（自分の心にかなった園遊であったこと）

（橘）

一九九八年九月二十四日受理

畑村　学　宇部工業高等専門学校一般科講師
橘　英範　姫路獨協大学外国語学部講師